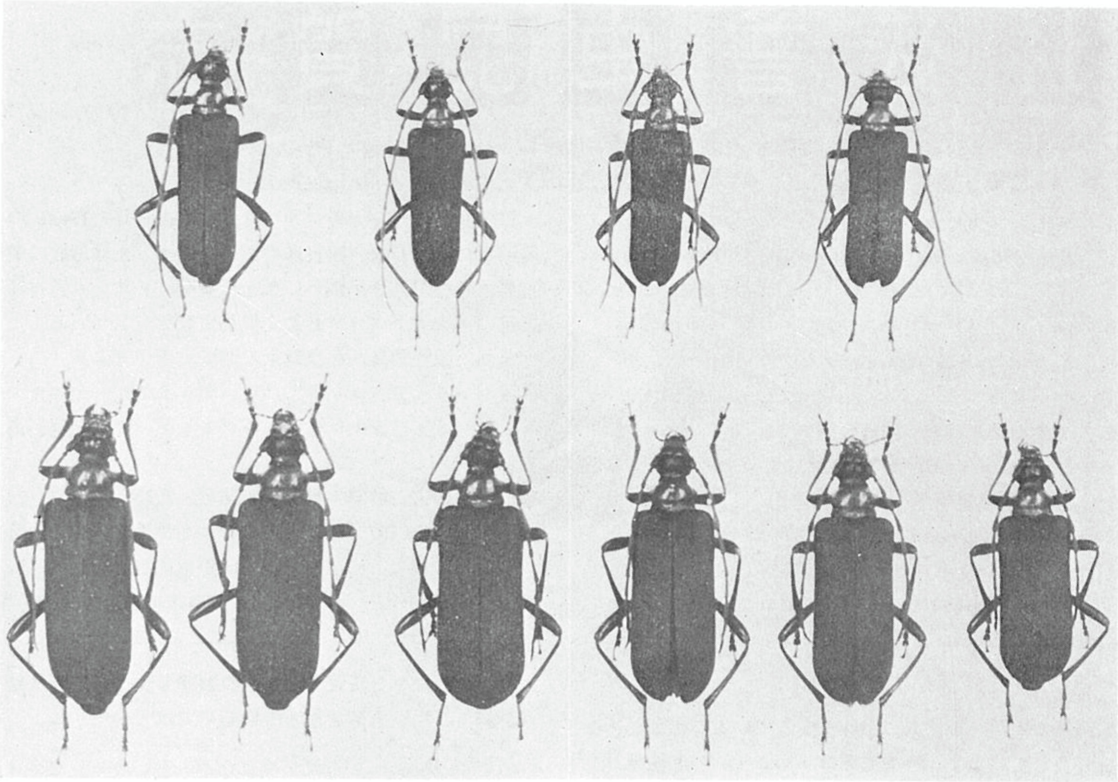


アカムネハナカミキリ　上段：♂　下段：♀

下部にとまることは少ないようで，いずれも上部の一番目につきやすい（飛来した時一番とまりやすい）部分の葉上に見られた。最後に採集したのは18時30分で，すでに暗くなりかけていた。夕方に多く見られたので薄明時に採集しやすい種かと思い，翌朝6時頃より付近を調べてみたがまったく見られず，8時過ぎ，気温がいくらか上昇してくるのが感じられるようになって始めて，1♂がイタドリの下部から茎を伝わって上部へ移動してくるのを観察した。この♂は上部の葉までのぼってから触角を脚でこするようなしぐさをして，その後は体についた湿気を乾かすように陽光を浴びて長い間静止していた。この時はこの1頭しかみられず，やはり午後4時過ぎまで1頭も付近から発見できなかったが，夕刻には前日と同じくイタドリ葉上と付近の雑草の枯れ茎に静止している個体が見られた。

両日を通じ，付近の白色花を丹念に調べたが花からはまったく見い出せなかった。美ヶ原ではヤマボウシ，ノリウツギの花上から得られているので，訪花するものと予想していたが，セスジヒメハナ，ニンフハナ，ツヤケシハナその他ハナカミキリの普通種が多く見られただけなのは意外であった。以上のことからして，本種は一般のハナカミキリと比べ，何か生態的に異なっているように思われ，今までの採集例の少ないのも単に発生する個体数が少ない？だけでなく，採集方法にも問題があるように思われる。成虫の日中の生態が判然としなかったのは残念だったが，本種がイタドリと何か密接な関係にあるように思え興味深い。

（〒386-11　上田市下ノ条1015-5）

波照間島のカミキリ

矢野　立志

1975年4月13〜15日に八重山群島波照間島にて採集を行い，計14種のカミキリを得ることができた。従来，この島におけるカミキリの記録はほとんど知られていなかったようなので，採集品のリストを報告しておく。

1. ヒゲナガヒメカミキリ
   Ceresium longicorne PIC, 3 exs.
2. リュウキュウヒメカミキリ[2)]
   Ceresium fuscum shirakii HAYASHI, 2 exs.
3. ムネモンアカネトラカミキリ
   Xylotrechus atronotatus gererosus MATSUSHITA 1 ex.

4. イシガキゴマフカミキリ[1) 2)]
Mesosa yonaguni subkonoi BREUNING, 19 exs.
5. サキシマウスアヤカミキリ
Bumetopia japonica ishigaki HAYASHI, 11 exs.
6. アヤモンチビカミキリ[2)]
Sybra ordinata flavostrinata HAYASHI, 18 exs.
7. アトモンチビカミキリ
Sybra baculina mimogeninata BREUNING et OHBAYASHI, 36 exs.
8. タイワンチビカミキリ
Sybra pascoei ishigakii BREUNING et OHBAYASHI, 1 ex.
9. フタホシサビカミキリ[2)]
Ropica dorsalis SCHWARZER, 8 exs.
10. フタモンサビカミキリ
Ropica caenosa (MATSUSHITA), 46 exs.
11. ヨスジシラホシサビカミキリ
Apomecyna histrio (FABRICIUS), 1 ex.
12. タテスジドウボソカミキリ
Pothyne albolineata MATSUSHITA, 6 exs.
13. ワモンサビカミキリ[2)]
Pterolophia annulata (CHEVROLAT) 20 exs.
14. シモフリナガヒゲカミキリ
Xenolea asiatica (PIC), 10 exs.

波照間島のイシガキゴマフは，今回得られた19exs.の範囲内では，石垣・西表島の個体に比べ，上翅斑紋の黄・黒色の色彩区分が細かいことで安定しており，宮古島北部のイシガキゴマフとよく似た斑紋を有している。

なお，波照間島からは以上の他に，ホソガタヒメ[2)]，ニッポンモモブトコバネ[1)]，ヤエヤマトラ[2)]，ヤエヤマフト[2)]，ムツボシシロ[2)]，モモブトトゲバ[2)]の記録がある。

1） 柏井伸夫(1975)：月刊むし56号，P.13
2） 草間慶一(1973)：日本産カミキリの生態と分布一覧表，新しい昆虫採集案内(３)

(〒734　広島市皆実町1-18-40)

編集後記

今回は原著・短報共に中々充実しているのではないかと自負しています。特に郷氏の *Kurarua* の雌性単為生殖に関する論文。以前から予想はされていましたが，カミキリムシ科で単為生殖が確認された例は，世界でも他に知られていないものです。

この論文を編集中，関係者の間では *Kurarua* 談議に花が咲きました。まず，台湾などの *Kurarua* には雌雄がいるのに，なぜ *rhopalophoroides* には雄がいないのか，ということ。これは同種が *Kurarua* 属の北限の種という点より説明する人が多いようでした。いわく，「ゾウムシでは，同一種でも生息する地域によって両性生殖（主に南方）か，または単為生殖（主に北方），と異なった生殖を行なっている種がいる。*Kurarua* 属の北限にいる *rhopalophoroides* は氷河時代のきびしい条件を乗りこえるために、単為生殖に切りかえざるを得なかったのだ」というような説ですが、そんな話をしているうちに不気味な存在が１つ浮んできました。

それは西表島から採れているという *rhopalophoroides*。1964年３月２日，今から13年前の１例しかなく，その標本も日本にはない（Bishop Museum にあるという），再確認が必要なものだったのですが，採集された当時，ちょうど同じ宿に泊っていて採集品を御覧になったという黒沢良彦博士のお話によれば，前胸は赤くなく *rhopalophoroides* とは違うもののようだったとのこと。もしかすると西表の *Kurarua* は別種，という可能性も考えられます。そして同種にせよ別種にせよ，本州より南に位置する西表島（氷河の影響も少ない）には雌雄がいて，両性生殖を営んでいるのでは………

西表で *Kurarua* の雄が採れた!! というビックニュースがもたらされたのは，そんな折も折でした。西表島西北部の干立部落で、今春のある日の夕方、花をすくっていた琉大のカミキリ屋T君の、カミキリモドキしか入っていなかったはずのネットの底で動めいていたのは，触角が体長とほぼ同長という *Kurarua* だったのです。その後に10数頭の雄と１頭の雌が採られたそうです。西表の *Kurarua* にはやはり雌雄がいたのです。はたして *rhopalophoroides* でしょうか，それとも別な種でしょうか。してその生態は……。(1977年４月16日，藤田　宏)

ELYTRA　Vol. 5, No. 1

昭和52年７月５日　印刷
昭和52年７月10日　発行
編集者　藤田　宏
発行者　草間慶一
発行所　日本鞘翅目学会
Japanese Society of Coleopterology
東京都台東区東上野4-26-8
福田惣一方（〒110）
c/o, FUKUDA, 4-26-8, Higashi-Ueno, Taitō-ku, Tōkyō-city, Japan
印刷　㈱大和印刷